



名物 うなぎの蒲焼

あい しゆく
間の宿「柏原」

東海道をかごや馬に乗った人々が行き交っていた江戸時代、東海道五十三次の吉原宿と原宿の間に間の宿「柏原」がありました。

柏原宿のあった場所は国鉄東田子の浦駅の西側あたりで、ここには9軒の茶屋（今でいう食堂）があり、浮島沼でとれたうなぎやなまずの蒲焼を名物に繁昌していました。この9軒の茶屋のうち、大正の頃まで営業していたのは酒惣という茶屋1軒でした。

今回は、この酒惣が母親の生家という市史編さん室の鈴木富男先生に間の宿「柏原」について、いろいろ教えていただきました。



うなぎの蒲焼のいいにおいも、金のない俺たちには「うなぎの旅」と弥次さん、喜多さんが、がまんして通った柏原の間の宿でした。



「釣りをやりたいが、郷土史の仕事が忙しくて」と語る鈴木先生。若々しい。郷土史の研究は旧須津村の助役時代から出版した本も二十冊近くになる。富士市の歴史関係なら、この先生の右に出る者はない。

間の宿「柏原」はどうして設けられていたのですか？

吉原宿と原宿の間が三里六町、約14^里。宿もあったので、この中間にあたる柏原に休けい所として間の宿ができたらしい。元禄3年（1690年）に出版された東海分間絵図に「かしわ原、茶屋かずかず、ここにうなぎ売りあり」と書かれていることから柏原のうなぎの蒲焼きは元禄以前から名物として旅人の味覚を楽しませていたことが分ります。また、間の宿柏原の成立も江戸時代の初期にさかのぼることができます。

このほか、十返舎一九の東海道膝栗毛の中にも、ここはうなぎの名物にて、家ごとにあおぎたてる蒲焼のにおいに、二人は鼻をひくひくさせ、

うなぎと難儀をかけた「蒲焼のにおいを嗅ぐも、うとましや、こちら二人は、うなぎの旅」と言って、がまんして素通りしたことが書かれています。

なぜ茶屋がなくなったのですか？

明治4年に宿場制度が廃止され、この柏原宿もなくなったのが大きな原因。でも明治になっても細々やっていたらしいが、明治22年、鉄道が通ると客足がぱったり減り、大正の頃までやっていたのは酒惣だけだった。酒惣のおばあさんのところへ行くと、うなぎの蒲焼をごちそうしてくれながら、「幕末のころは「遅い！」と峯打ち「早く持ってこい！」と柱に斬りつける武士がいて、こわかったよ」と話してくれました。



表紙のことは

子供たちのための学習講座として、各公民館に「ふるさと学級」が設けられています。

富士公民館のふるさと学級では「古代人になってみよう！」と火の起こし方や石器づくりに挑戦。今回は古代の服づくりです。全員で方法を話し合い、麻を材料にかます編みの要領で織りました。「時間はかかるけど、頑張るよ」と平田・村松・小林さんのグループは話してくれた。